



血管内プラークイメー징ングを用いた 不安定プラークに対する治療戦略 — その現状と未来展望 —

座 長 順天堂大学医学部循環器内科 教授
代田 浩之 先生

演 者 山口大学大学院医学系研究科器官病態内科学 講師
廣 高史 先生

日 時 **2006年9月26日(火) 12:00~12:50**

会 場 **第13会場 マリンパレス・マリンホールA(鹿児島)**

共催セミナーへのご参加には整理券が必要です。整理券は当日配布させていただきます。
整理券の配布時間・場所につきましては、当日、学会総合受付にてご確認ください。

共 催

血管内プラークイメージングを用いた不安定プラークに対する治療戦略

— その現状と未来展望 —

Current Status and Future Perspectives of Therapeutic Strategy for Vulnerable Plaques by Guidance of Intravascular Imaging Modalities

廣 高史 先生 山口大学大学院医学系研究科器官病態内科学 講師

プラークイメージングの時代が到来した。血管内エコー法、血管内視鏡、OCT、MDCT、MRIなど、ありとあらゆる物理媒体を用いて、プラークからの情報を得ようとする試みがなされている。その中で、いかにプラークの不安定性を評価し、その経時変化を追うことができるかが一つのメインテーマとなっている。

さてプラークの不安定性とは、どう定義されるのであろうか。プラークの「不安定性」とは、プラークの破綻を前提にした概念であることは言うまでもないが、厳密かつ定量的な定義はいまだ確立されていないのが現状である。私達は、主として血管内エコー法によるプラークの不安定性の評価法について模索してきたが、病理学的に不安定プラークの特徴とされる線維性被膜の菲薄化や脂質コアの大きさなどをいかに捉えるかに主眼が置かれてきた。しかし、その後の研究により、線維性被膜が同じ厚さであっても、プラークによってその脆弱性は大きく異なることが指摘されるようになった。すなわち、病理学的変化が完全に把握できるイメージング技術が確立されたとしても、不安定性を確実に評価できるとは限らないことが示唆されるようになった。

さらに、multiple coronary ruptureや、multiple healed plaqueがACS患者で報告されている。これは、一つのプラークの破綻だけではACSの発症にすぐさま対応していないことを示しており、むしろ包括的にvulnerable patientという概念をもってプラークをアプローチすべきことが提唱されるに及んでいる。しかしvulnerable patientの評価となると、より多面的にアプローチする必要がある。その中で、古典的な冠危険因子や、数多くのバイオマーカーと並んで、プラークイメージングが単にACS発症のリスク評価因子に過ぎないのだとすれば、観血的な検査法であるが故に将来発展していく可能性は少ないかもしれない。従って、観血的プラークイメージングから治療に直結する情報がいかに得られるか、について今後なんらかの臨床試験を通じて明らかにしていく必要がある。

本セミナーでは観血的プラークイメージングの現状を見渡し、不安定プラークの治療にどう結びつけていくのか、その将来展望について紹介したいと思う。また、IVUSでみたACS患者における非責任病変のプラーク量に対するピタバスタチンの効果を評価する目的で行われている国内多施設臨床試験JAPAN-ACSについて、その概略を紹介し、不安定プラーク治療の実践法についてもあわせて考えてみたい。

略歴 廣 高史 先生(ひろ たかふみ)

昭和58年 3月	山口大学医学部医学科卒
昭和62年 3月	山口大学大学院医学研究科博士課程卒
昭和62年 4月	山口大学医学部附属病院医員
昭和62年 7月	山口県厚生農業協同組合連合会周東総合病院医員
平成元年 4月	同上内科副部長
平成4年 1月	同上内科部長
平成4年 4月	山口大学医学部附属病院医員
平成6年 3月	University of California, Irvine, Department of Medicine, Division of Cardiology 研究員 (Jonathan M. Tobis 教授に師事)
平成8年 7月	山口大学医学部附属病院医員
平成8年 8月	下関市医師会病院医員
平成9年 2月	山口大学医学部附属病院医員
平成9年 3月	山口大学医学部附属病院第2内科、文部教官助手
平成11年10月	山口大学大学院医学系研究科器官病態内科学講師 現在に至る